



勅使池を探検する 沓掛小4年生

いったい、本当のところはどうなのでしょう。電力の安定供給には原発が不可欠だという説明もあれば、節電意識の高まりと技術の進歩で、すべての原発を無くしてもエネルギー不足は起きないという意見もある。原子力による電気は安いという主張に対しては、電源立地地域対策交付金を含めれば決して安くはないという人もいる。再生可能エネルギーによる発電は不安定で供給力も不足しているから火力で補うと燃料の輸入が増大してコストが上がり、ただでさえ競争力の落ちている日本の輸出産業のエネルギーコスト上昇を招き、したがって失業が急増するという人もいる。

原発の安全性についても業界関係者と研究者の言うことが利害と都合に基づいていた(いる)ことがこのところ明らかになってきた。原発立地の活断層については科学的な知見を期待してもよさそうだが、これについてもなにか真実なのかよく見えてこない。「想定外」とされた事態を想定していた人たちがいたこともわかってきた。「失敗する可能性のあることはいずれ必ず失敗する」という「マーフィーの法則」の正しさが証明されたというより、失敗の可能性が最初からわかっていたのではないのか、という疑念がある。

国連での決意表明の後、地球温暖化防止の話をししばらく聞いていないなど思っていたら、「京都議定書」の延長が決まったが、工程表も無く、守れるかどうかわからない約束をするような人間に我々はなってしまったらしい。

■目次

★真実は奈辺に?.....	P 1
★特集「食を考える」	
・いま、私たちにできることは?.....	P 2
・食べ物大切に 平和への一歩/ 県民・市民の創意で 食料を大切に作る習慣を!!.....	P 3
・食料危機時代 どうする日本!.....	P 4
・食料自給率の不思議 ?.....	P 5
・市民菜園から食を考える/ 地球温暖化・異常気象が食の危機を招く.....	P 6
・ちょっぴりの自給自足～ 市民農園 よもやま話.....	P 7
★原子力発電の歴史.....	P 8
★医科学における歴史的発明・iPS細胞*	
祝:山中教授ノーベル医学・生理学賞.....	P 9
★沓掛小学校4年生総合学習 勅使池探検/ 勅使池・井堰川探検 まとめとお話.....	P 10

さまざまな立場や利害があって原発推進を語る人たちも、放射性廃棄物の処理については適当なことしか言わない。「そのうちだれかがやってくれるでしょう」的なことを本当に心の底から考えているのだとすれば、このあいだ電車でジュースの空き缶とパンの袋を置いたまま降りようとした若い奴と同じだ。でも彼らは、「忘れ物だよ」と注意したら慌てて戻り、ゴミを持って降りていっただけましかも。

政治は党利・党略があるので断定的な発言になり、「熟慮」や「真摯な思い」が語られることはない。ホンネは票にならないだろうが、被災者や後の世代のことを考えたとき、まだそのレベルですかと訊きたくなるし、そういうものかと悲しい諦めもある。

こうした人たちがすべて大人であるという事実が悲しい。「嘘をついてはいけない」と親や学校の先生に教わらなかったのだろうか。大人は嘘をつくものだ? まあ、そりやそうですが…。ドイツの環境保護運動の出発点は1960年代末の学生運動であるが、その時のスローガンは「25歳以上の連中を信用するな!」というものだったことを思い出す。

というわけですが、私たちが真実を知っているふりはしないで、できる限りにちゃんと考えて、そして少しずつ歩んでいきたいと思っています。これを読んでくださっている皆様にとって今年がそれなりによい年でありますように祈念し、年頭のご挨拶といたします。

(理事長 浜島 昭二)

★作柄不良!大豆栽培授業/森の探検.....	P 11
★沓掛堆肥センター&東部知多グリーンセンター見学会/ サツマイモ体験農園 収穫祭.....	P 12
★一市民42名が参加ー「ぶらり豊明おもしろ発見!」..	P 13
★野菜づくりは心の経営.....	P 14
★総り 山田試験農園から.../パンジーの植付け/ レンゲソウの種まきました/おらが農園耕作者募集..	P 15
★「ふゆみずたんぼ」3年目が終わりました/ 豊明市のため池調査.....	P 16
★炭焼き活動を活発に!! 美浜町炭焼き研究会 視察・ 研修受け入れ/環境川柳.....	P 17
★二村山だより25 キノコの観察会を開催 ちょっとな かじって味見も~/二村山 里山整備と自然観察会..	P 18
★INFORMATION	P 19
★環境研の活動10月～12月/編集後記.....	P 20

…いま、私たちにできることは？…

食糧は私たちが生きていくために、欠かせないものです。そのためには将来に亘って、安全な食糧が安定的に供給されることが必要です。

日本では何時、何処の地方・地域に行ってもスーパーやコンビニなど店舗があり、棚には食料が沢山並んでいて、食料の危機を感じません。しかし、日本の食は危機的な状況にあると言われてい

ます。日本は食料自給率39%、これは世界の主要先進国のなかでワースト1位で、米以外ほとんどの食料を輸入に頼っているのが現状です。世界的に食糧不足が予測されている今、日本は食糧危機の高い国と言われています。

◆世界人口の増加

世界の人口が既に70億人を突破したと報じられています。今後更に大幅な増加が予測され、50年後には90億人、現在世界中で生産されている穀物の総量は現在の70億人分の消費量を賅っていませんが20億人分の食糧の確保が必要とされます。

人口増加による需要増加と中国、インドなど多くの人口を抱える国の工業化・都市化・食生活の変化・環境破壊による供給減少が予測されます。これにより世界全体で「食糧危機の始まり」とされており、日本も食糧輸入が困難になるかもしれません。

◆食料を巡る課題

世界の食糧市場は穀物類を中心にひっ迫傾向にあり、食料の争いが強まるともいわれています。

その一、特にトウモロコシにおいては、世界生産の4割強が、輸出の6割弱を占める米国においてバイオエタノールの生産が急激に増えたため、食用としてのトウモロコシの流通に影響してきていること。また中国が輸出国から輸入国になったことによって、米国から輸入していた日本は限られた輸出货量を巡っての争いの可能性も出てきています。

その二、温暖化対策と原油価格の高騰を背景に、多くの国々でバイオエタノール生産が急増してきており、その拡大は穀物価格を高騰させ、貧困層においては買うことが出来ず「貧しき者を更に貧しき者」に拡大させています。

また、トウモロコシ価格の高騰は家畜の餌代に跳ね返り、さらに食肉価格を上昇させる結果にもなります。既に世界では食糧価格は上昇してきており、日本でも穀物類の価格が上がり始めています。

◆日本の現状

このような状況の中でも、私たち日本人は60%を超える輸入品および加工品などで世界中の食を味わい、実に「贅沢三昧」の姿。日本では、年間約1,900万トンの食品廃棄物が排出されており、この中には、本来食べられるにも関わらず廃棄されるもの食品ロスが500~900万トン(家庭からの食品ロス200~400万トン)含まれると推計されています。

私たち日本人は、飽食の中で生活をしているのです。食について考え・見直さねばならない時が来ています。不測の事態が来たからといって即座に対応することは不可能な課題です。

今後も安全で安定した食生活を維持していくためには、国内で作れるものは出来る限り国内で作り、その上で輸入及び備蓄と平行して、国内での食料自給率の低下に歯止めを掛け、供給力を確保していくことが必要となって来ています。(熊谷)



食糧かバイオエタノールか
どうするトウモロコシ!?

スーパー・コンビニには
溢れるばかりの食料品
いつまで続く?



これは中日新聞の投稿欄に掲載された小学生の記事です。

当機関紙では、同じテーマの特集を組みました。是非、掲載して多くの皆様に再度読んでいただきたく、中日新聞社にお願いし、ご本人の了解を得て掲載しました。

中 日 新 聞 月 刊

ヤングアイズ

田牧 由衣 小学生 12 (岐阜県多治見市)

私は、食べ物を粗末にしないことが平和への第一歩だと思つた。

私の祖父は野菜を育てて、時々分けてくれる。その時の祖父や母はともうれしそうだ。だから、食べ物があることに感謝しながらおかげで人となりがりも深くなるのではないかと思つた。

しかし、戦争のころは配給で十分な食べ物ももらえず、毎日雑炊で食料不足が続いた。

中には、イモやカボチャのつるまで食べていた人もいたという。世界ではどうだろう。国連世界食糧計画(WFP)のホームページを見ると、八億七千万人の人が栄養不良だという。WFPはそうした人たちに食べ物を届けている。このことを考えれば、食べ物

食べ物大切に 平和への一歩

があることに感謝しないといけない。食べ物を粗末にしてはいけない。そのことに一人でも多く気がつけば、世界への支援がもっと多くなり苦しむ人も少なくなると思つた。

県民・市民の創意で 食料を大切にすることを!!

飽食の中で食生活を営む日本人の私たちには考えられませんが、既に世界では飢餓人口は8億7千万人。飢餓とは、日々食する食料が充分に無く食べられず栄養不足となり、生存と日常生活が困難になっている状態を言います。

日本でも戦中・戦後においては、食料の配給制度があり、配給されたとしても十分な食料を貰うことが出来ず食料不足が続き栄養不良の子もいました。

しかし現在は如何でしょうか。量・質ともに改善された食生活が要因の一つとも言われる「生活習慣病」(糖尿病、高血圧症、心臓病など)に悩まされている人々が年々増加している状況です。余りにも皮肉な現世相です。

◆供給が足りなくなる

地球上で生産できる食料には限界があります。いま増え続けている人口を何時まで養い続けられるでしょうか……? 世界の穀物市場では、2000年以降中国やインドなどの人口多数国が高度経済成長を続けていることによる穀物需要増加に注意が喚起されるようになりました。このため世界の穀物需要は、更なる供給不足へと一変してしまいました。不安定化する世界の食料市場を見ると、食料不足の問題は、これから否応なしにやって来そうです。食料危機に備えるには、「もの」を大切にするという日本の美德を食料に関しても必要とするのではないのでしょうか。

先述しましたが、世界人口の8人に1人が飢餓に苦しむ中、日本では穀物の国内生産は年間1000万トン、その3倍の穀物を輸入し、年間4000万トン消費していることとなります。実際にはその半分が人の口に入り、残り半分が廃棄されているという状況なのです。このような状況は、世界の穀物市場からは放置できないことであると考えられます。今までは日本が穀物を輸入しようとするれば、高い値段を支払えば食料は比較的容易に市場で手に入れることができましたが、その時代は終わりつつあります。

欧州には、「農業を疎かにする国は滅びる」という考えが根付いていると言われていています。日本では今日まで工業化による「経済立国」を目指す一方、「農業」が疎かにされてきたと言えるでしょう。

◆不測の事態を避けるには

もはや世界を頼りにする時ではありません。国民が最低限度必要とする食料を国内で確保することが必要です。不測に備えるまでには多くの時間が必要ですが、①農地制度の改革＝耕す者すべてに農地の所有を認める、②食料自給率の向上＝耕作放棄地や生産調整を実施している場合ではない、③家庭菜園・農園を持つ＝食料不安の解消・地産地消、自然との触れあい、④子どもたちの教育＝食を通じて生きる力を養う、⑤食品ロス削減などについて国民一人ひとりは何が出来るか知恵を出し合い解決しなければならないでしょう。(熊谷)

食料危機時代 どうする日本！

篠原 信氏の講演「日本人は何人養える？」から

2007年11月、当NPOと豊明市主催で有機循環推進フォーラム2007 食料危機を考える講演会「日本人は何人養える？」を開催しました。今号の特集の参考として、篠原 信氏(注)の講演の一部を掲載します。

◆日本はこれから、どうすればよいでしょう？

長期、中期、短期の時間軸と、地域サイズの空間軸に分けて考える必要があるでしょう。長期的には、日本の人口は大きく減少していくと予想されています。その時には高い自給率を達成できるように、今から国内の生産体制を整えておくことが大切でしょう。

中期的には、大き過ぎる人口と小さ過ぎる食糧生産力とのアンバランスが続きますから、そのギャップを輸入食料で埋める必要があります。そのためには農産物以外の商品で海外に売れる商品を作り続けて行かなければなりません。産業の空洞化をなんとか抑え、新規な産業を産み出していく活力が求められます。

短期的には、海外諸国と良好な関係を築くことではないでしょうか。特に、隣国の中国や韓国は今後も経済の発展が予想されます。日本が苦況に陥ったときに、頼りになるのはこうした国々だと思います。

次にどのサイズの地域を考えるかですが、日本全体となると、非常に難しいと云わなければなりません。日本が迎える可能性の高い危機は財政破綻であるため、国の政府そのものが十分機能し得るか、分かりません。従って、日本全体での対策も重要ですが、道府県レベル以下のサイズで対策を練ることが現実的でしょう。

東京などの大都市圏を除けば、自給体制をとれ

る農業地域は結構あります。どうかできるところからどうにかして、余力を他府県に振り分けて貰えたらありがたいです。都市で行える農業技術の開発も大切だと思います(ベランダ栽培、屋上栽培)。

さらに、国内だけに思考を狭める必要はありません。国家の枠組みで考えるのではなく、人と人とのつながりで考えてみてはどうでしょう。日本で生産することだけに拘わらず、たとえば中国などへ農業指導に行って現地の振興と親睦をはかり、生産した一部を日本に送って貰うということも可能ではないでしょうか。

国連の緒方貞子さんが「人間の安全保障」と表現しているように、国の枠組みを超えて、人と人とのつながりで、一人一人の生活が安定するようにはかるのです。インターネットの登場は、こうしたことを可能にしてくれます。誰かだけが富んでその分誰かが損をするというようなこれまでの社会構造を改め、どの国のどんな人も、いたわり合い励まし合える仕組みづくりを、諦めずに続けていきたいものです。

引用：有機循環推進フォーラム2007「日本人は何人養える？」篠原 信氏の講演(NPO法人環境研究所豊明のホームページより)

<http://park.geocities.jp/huta1311mura/youkizyunkan-symposium-2007.html>

注) 篠原 信氏

農業技術研究機構 野菜茶業研究所 主任研究員

食べられるものまで棄てていませんか — 賞味期限と消費期限 —

食品に「消費期限と賞味期限」が表示されるようになって、まだ食べられるものまで、大量(年間 500 万トン以上)に廃棄されるようになりました。また、表示に頼り過ぎて自分で判断できない人が増えているようです

- 「消費期限」 おおむね5日以内を越すと危ないことを意味する期限
- 「賞味期限」 製造メーカーが品質を確実に保証している期限
- 「常温で保存」 摂氏15度~20度で温度変化の少ない所に保存することを意味する(熱を発する電化製品やガスレンジの近くは適さない)

これらの食品の期限を設定しているのは主に食品製造者。本当の期限よりも厳しく設定しているのでまだ食べられるものまで廃棄され、問題になっています。食品が劣化する要因とその要因を減らすための知恵をつけ「食べられる・食べられない」を判断する感覚(味覚、視覚、臭覚など)を磨き、食べ物大切にしましょう。

参考：「賞味期限がわかる本」宝島社 徳江千代子著 東京農業大学客員教授



食料自給率の不思議!?

私たちは、こう信じていないでしょうか。「日本の食料自給率は低い」「世界的食糧危機が将来やって来るから、日本は食料自給率を高めて備えなければならない」「日本の農業は弱く、保護しなければ崩壊してしまう」。これは農水省が国民を欺き、洗脳してきたのだと農業専門雑誌「農業経営者」の副編集長の浅川芳裕氏は論理的に明らかにしています。そう言われてみれば、前者を信じて疑わなかったのは何故でしょうか。

農水省の発表している食料自給率は、平成23年度はカロリーベース(注1)39%で先進国の中では最低水準だと喧伝しています。生産額ベース(注2)では66%で、他の国に見劣りしていません。ところが農水省は、前者だけを公式の自給率として発表しています。これによれば23年度豚肉の国産比率は52%ですが、その飼料となる穀物の自給率が低いのでカロリーベースの自給率は6%となっています(下記の表参照)。卵は96%が国産なのに、飼料の自給率がゼロに近いので9%となっています。それに、廃棄される食品のカロリーも計算に入れていません。これは

おかしくないでしょうか。自給率を高めることだけが目的なら、実現するのは簡単です。すべての農産物の輸入を禁止すれば100%になります。途上国で自給率が高いのは、農産物を輸入するお金がないからです。日本も江戸時代には各藩は自給自足だったので、自給率は100%でした。自給率に拘ってきたのはやはり、洗脳されていたのでしょうか。意味がないように思いますが、要するに「米」が問題なのでしょう。自給率を高めると言いながら減反しているのですから、完全に論理が矛盾しています。日本の食料自給率は決して低くないという専門家もいます。カロリーベースという指標を国策に使っているのは世界で日本だけのようです。カロリーベース食料自給率などという指標はWTO(注3)でも認めていないし、各国で算定もしていないそうです。農水省の出している「各国比較」は、彼らが勝手に計算をしているだけで、「50%を切る数字でないと不安をあおれないが、エネルギーのように4%だと諦めてしまう」ということで農水省が1983年から発表し始めた日本だけの統計だということです。

日本の農業は世界有数の高い技術力(実力)を持ち、食料の増産に成功しています。日本の農業生産額は平成23年には、約9.7兆円あり、日本はれっきとした農業大国?ではないでしょうか。自給率の不思議!?(中村)

注1)「日本食品標準成分表2010」に基づき、重量を供給熱量に換算したうえで、各品目を足し上げて算出。これは、1人・1日当たり国産供給熱量を1人・1日当たり供給熱量で除したものに相当。

(例)カロリーベース総合食料自給率(平成23年度) = 1人1日当たり国産供給熱量(941kcal) / 1人1日当たり供給熱量(2,436kcal) = 39%

注2)「農業物価統計の農家庭先価格等」に基づき、重量を金額に換算したうえで、各品目を足し上げて算出。これは、食料の国内生産額を食料の国内消費仕向額で除したものに相当。

(例)生産額ベース総合食料自給率(平成23年度) = 食料の国内生産額(9.7兆円) / 食料の国内消費仕向額(14.5兆円) = 66% 参考:農林水産省

注3)世界貿易機関

食料自給率の推移 [%]

		昭和 50年度	60年度	平成 7年度	22年度	23年度 (概算)
品目別 自給率	米	110	107	104	97	96
	小麦	4	14	7	9	11
	大麦・はだか麦	10	15	8	8	9
	いも類	99	96	87	76	76
	大豆	4	5	2	6	7
	野菜	99	95	85	81	79
	果実	84	77	49	38	38
	牛肉	81	72	39	42	40
		43	28	11	11	11
	豚肉	86	86	62	53	52
		12	9	7	6	6
	鶏肉	97	92	96	68	66
	13	10	10	7	8	
牛乳・乳製品	81	85	72	67	68	
	44	43	32	26	28	
飼料用を含む	40	31	30	27	28	
主食用穀物自給率	69	69	65	59	59	
供給熱量ベースの	54	53	43	39	39	
生産額ベースの	93	82	74	70	66	
飼料自給率	34	27	26	25	26	

牛肉、豚肉、鶏肉、鶏卵、牛乳・乳製品の下段()内は飼料自給率を考慮した値

資料:農林水産省



市民菜園から食を考える

環境研究所豊明では、「おらが農園」と称して遊休農地を再生するべく市民菜園の普及に力を入れている。

私自身も、家庭菜園を楽しんでいるのであるが、昨今の社会状況を考えると概略次のように言えるのではないかな。

◆世界の人口爆発・日本の人口減少は……

世界の人口は現在70億人、少し歴史を振り返ると産業革命当時の1800年頃はわずか10億人、石油を使うようになった1900年頃は20億人であるのに対し、ここ12年のうちに10億人も増えて現在のような数字になっている。この傾向は続きそうな形勢なのである。

一方日本はというと2005年から人口は減少傾向に入り、1億2000万人という状況で、その内容をご存知の通り少子高齢化なのである。ということは人口構成で老人のウェイトがますます大きくなり高齢化が進み、医療や介護など公的な保険の負担が、ますます膨らんでいくと予想される。

また、高齢化の進展は、医療機関、介護施設などが追いつかなくなり、何れ地域社会全体で支えあう時代が来るものと思われる。

◆健康な高齢社会を

高齢者が家に閉じこもることなく、外気に触れて体を動かし身体能力の衰えを遅らせ、健康を維持

可能な社会環境を創ることが必要でなかろうか。

そこで解決策の一つ、市民菜園で健康野菜を作ることが考えられるのではないかな。「今何作ってんね?」「出来はどうね?」という話が弾み、自ずと季節感を育み、野菜作り技術の伝承と地域コミュニティーの場になっていくに違いない。

◆手作り野菜から食を考えて

しかし、市民菜園は大規模にやれるものではないが、地産地消すなわち地元で作ったものを地元で消費する顔が見えるものになる。また、地域の資源、地域で賄えるものを融通しあうという心が通う大切な取組みでもあると思う。

私自身も生ごみや落ち葉を堆肥化したり、竹藪の竹で農業用支柱や霜除け、藁(わら)やモミガラを利用して新鮮で無農薬の旬の野菜を栽培し食べたり、お裾分けをしたりしている。それこそ持続可能な試みだと思う。

世界の食糧事情とか TPP のことは、個人では何ともし難い。しかしながらそのようなことに責任はもてないとしても、自分たちでさきやかに出来ることがあるとしたらそのようなことではないかな。どこか他所から取り寄せての化成肥料や種子や農薬ならば、事情が急変すれば手に入らなくなるかもしれないが、自給自足が、いくらかでも出来れば、安心を手に入れることになるのではないかな。そんなことを考えてみるのである。(稲妻)

地球温暖化・異常気象が食の危機を招く

ここ150年の世界の平均気温の観測結果を見ると、上昇の一途を辿っています。特に1910年以降については、約1℃上昇しています。しかも、最近になるほど上昇の率は大きく、20年で約0.5℃も上昇しています。日本の昨夏では、夏日(最高気温が25℃以上)は西南日本では40日以上増え、真夏日(同じく30℃以上)、猛暑日(35℃以上)も増えました。今後も暑い夏は、全国的に増えるであろうと予測されています。

このような異常高温に見舞われれば、農作物の

高温障害も避けられません。他に大雨・集中豪雨、強風、干ばつと水不足、豪雪など異常気象が続けば、農作物への被害も甚大になります。世界中で異常気象が起きているので、輸入に頼る日本の食料危機も迫っていると言えます。異常気象による水不足や高温・低温の異常では電力不足を来します。これらは、いずれも長期的な対策を立てる必要がありますが、私たち一人ひとりにも出来ることがあります。(坂井田)



～ちよっぴりの自給自足～ 市民農園 よもやま話

◆耕作放棄地の現状—食料消費国へ

農林省、農林業センサス(注)の平成 21 年度耕作放棄地に関する現地調査の結果は、耕作可能な土地が約 39 万ヘクタール(内、休耕地 20 万ヘクタール)、現状では耕作不可能な土地が約 29 万ヘクタールあると公表しています。

耕作者は、人口の3%にも満たない約 260 万人の農家が何とか頑張っていますが、その多くが高齢者です。

◆農林水産省の取り組み

平成 15 年 4 月に構造改革特別区域法を施行、平成 17 年 9 月には全国で特定農地貸付法を施行、これにより多様な者による市民農園の開設が可能となりました。また平成 18 年 3 月、市民農園で栽培した農作物の販売が可能な範囲についての考え方を示すなどさらに市民農園開設を推進。その結果、平成 23 年 3 月現在全国で 3811 農園が開設されました。

◆名古屋市の取り組み

市内の貸し農園には憩いの農園、コミュニティ農園、市民菜園、分区園の 4 種類があり、さらに増設の予定もあるようです。多くが 1 区画 20 m²で 1 m² 500 円、農機具は常備され 使用期間は1年です。現地の耕作者からは、倍率 4 倍の抽選に当たらないと翌年の利用ができないのが辛いと言う声が聞かれました。貸し農園は主に、名古屋市の受託事業として財団法人名古屋市みどりの協会が行い、名古屋市はホームページ、区役所情報センター、図書館などから市民への情報提供をしています。

◆近隣の市民農園の現状

大府市、みよし町、知立市、日進市などは 1 区画 20 m²～30 m²で 1 m² 300 円～400 円というのが多く、共同の農具が常備されているようです。企業の農園への参入も少しずつ広がりを見せていますが、利用料金がネックになっているのか、見学先では空き区画が目立ちました。採算を考えると、民間の市民農園運営には多くの課題があるようです。

◆NPOの取り組み

では、NPO法人として市民農園を運営しているところはのでしょうか。NPO法人里づくり協議会が三重県内で展開している「マイガーデン」は概ね 1 区画 5 坪で 24000 円、農機具は常備という条件です。伊東市のNPO法人郷組(さとぐみ)市民農園は、

1 区画 30 m²～60 m²で 1 m² 400 円、NPO法人まちづくりネットワーク島根は 1 区画 30 m²で 1 m² 300 円～330 円で 2010 年から取り組んでいるようです。

◆当NPOの取り組みと課題

「企業では難しく、公的な取り組みにも限界があつてやれない事」を担うのがNPOだと考えると、これからは各地で市民農園を開設するNPO団体が増えてくるかもしれません。が、ボランティア精神だけでは活動を続けられません。また、若い世代にもきちんと引き継いでもらうためには、資金面でしっかりとした計画が必要です。当NPOも「田んぼや畑のあるまち・豊明市」を目指すためには、この課題を乗り越えなければなりません。幸いにも市内にはまだ農地が残されており、年々宅地化が進む名古屋市に隣接しています。すでに利用されている緑区の人達から「ここは良いねえ」と言う声を聞くと、まだまだ名古屋市民の利用が増えることが期待できます。

これからも、他市町の取り組みも参考にしながら、また、市や市民の皆様のご理解を得ながら、この活動を拡げていきたいと思ひます。(丸山)

注) 農山村の実態を総合的に把握し、農林行政の企画・立案・推進のための基礎資料を作成し、提供することを目的に、5年ごとに調査を行う。



空き区画が目立つ大府市内の企業が運営する市民農園



人気の高い豊明市間米町純掘の「おらが農園」

原子力発電の歴史

福島原発事故から1年半経過した現在も、高濃度の放射性物質は出続けており、復興はおろか復旧作業も遅々として進まない中、16万人の人々が、いつ生まれ育った土地に帰ることが出来るのかわからないまま、避難生活を余儀なくされています。今回の事故を経験して、世界で最初の被爆国である日本で、一つ間違えれば日本全土が放射能に汚染される危険性のある原子力発電所を作ろうとした動きはいつごろ始まったのか調べてみました。

◆正力松太郎氏と中曽根康弘氏

今からおおよそ60年前の1950年代に遡ります。1950年代といえば、まだ高度経済成長が始まる前であい石油が手に入る時代ですが、1955年12月に原子力基本法が成立し、1956年1月に原子力委員会が設置されています。ここから原子力発電の流れが本格化して行くわけですが、その中心的役割を果たしたのが、正力松太郎氏と中曽根康弘氏だったと言われています。

1954年3月1日、マーシャル諸島のビキニ環礁で米国の水爆実験が行われ第五福竜丸が被曝し1人の犠牲者を出すという事件がありました。これをきっかけに日本では原水爆反対運動が活発になり、署名運動も3000万人にも及び全国的な広がりになってきましたが、この運動を鎮める役目を果たしたのが、正力松太郎氏の懐刀として活躍した柴田秀利氏でした。彼の著書「マスコミ回遊記」によれば、「このまま放っておいたら營々と築きあげてきたアメリカとの友好関係が破局する。そこでアメリカ代表のワトソンに、日本には昔から毒は毒をもって制するという諺がある。原爆反対運動をつぶすには、原子力の平和利用を謳い(うたい)産業革命の明日に希望を与えるしかない」と自分の結論を告げました。ワトソンもそれで行こうと賛意を示した。そのあと、政府間ではなく民間協力の線で『原子力平和使節団』の名のもとに日本に送り込むようハッパをかけ1955年の元旦の紙面で社告を出し天下に公表した」と書いています。このように読売新聞が中心となり原子力平和利用の動きが展開されていきます。正力松太郎氏は原子力委員会初代委員長と科学技術庁初代長官になり「原子力の父」と言われていました。

◆「原子力委員会」発足

1955年末に「原子力平和利用博覧会」、1956年元旦に原子力委員会が発足し、正力松太郎氏がしかけた原子力発電所への道が大成功を収めました。そして、1954年3月に中曽根氏を中心とした議員提案で、原子力の平和利用研究のため初めての予算が付きまして。2億3500万円でしたが、この金額はウラン235にちなんで決められたそうです。その後、中曽根氏を中心となり、原子力の関連法案を成立させています。

正力氏に訊ねることはもはや出来ませんが、中曽根氏はまだ健在です。福島事故を受けて今の日本の現状をどう見ているのか聞きたいところですが、中曽根氏の声は聞こえて来ません。

◆政府の責任で復興を急げ

原子力発電の存続か廃炉かが議論されていますが、使用済みの核燃料棒の最終処分の方法が確立されていない現状では原子力を使うべきではないと思いますが、原子力発電を国策として推進してきた政府の責任は重大です。それゆえに東電まかせではなく国が先頭に立ち、一刻も早く復旧・復興を果たし、国民が安心して生活できるよう全力をあげて取り組む事が、政府の果たすことが出来る唯一の責任だと思います。(岩名)

〈参考文献〉

・ウィキペディア

・孫崎 享著 「戦後史の正体」



東京電力福島第一原発 特定施設に指定 廃炉の監視強化

沓掛小学校4年生総合学習

勅使池探検

実施日：2012年10月12日(金) 参加者：3クラス92名 担任、保護者のボランティア、スタッフ

沓掛小学校 4年生の総合学習で勅使池を探検しました。勅使池は豊明市で一番大きなため池で解放感があり、生徒たちは好奇心にうち溢れ生き活きとしていました。

バックテストでCODや亜硝酸態窒素(注)などの水質調査、五感を使った「水のきれいさ」調査、透視度計による水の濁りなどを調べました。勅使池の水は植物プランクトンが多く、いつも薄緑色をしています。夏にはアオコも発生します。有機物も多く、CODの数値は、3クラスの平均で27mg/lもありました。透視度は濁っていて6.5cmでした。

生きものでは、ドンコやタモロコ、コイの稚魚、スジエビ、タニシなどが捕れました。

自然を探検することで、何を感じたでしょうか。水は多様な生きものの命をつないでいます。人間の勝手な振る舞いで水を汚したり、護岸を改変したりしないで欲しいものです。

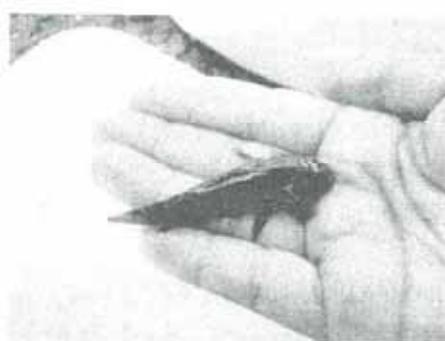
勅使池の自然探検は、感性を育む貴重な楽しい体験授業でした。(中村)



勅使池で生きもの探し



スジエビがたくさん捕れたね



頭の大きなドンコ 愛嬌がある!?

注) COD、亜硝酸態窒素については14ページの「豊明市のため池水質調査」をご参照ください

沓掛小学校4年生総合学習

勅使池・井堰川探検 まとめとお話会

実施日：2012年10月24日(木) 参加者：3クラス92名 担任、スタッフ

井堰川とその水源である勅使池の自然を探検する体験学習を行いました。当NPOが協力をして、3年になりますが、元気いっぱいの生徒たちと一緒にサカナを追いかけて、石の下や草の根元に潜む命を探すのはワクワクする一時です。

川や池など水辺の自然を探検した後、まとめの授業を行っています。

今から480年前、勅使池を開削した先人たちの苦勞や、米作りに欠かせない大切な水を貯水したため池である勅使池の歴史をDVDで鑑賞しました。

水の大切さを少し理解してくれたのではないでしょう。

次にパワーポイントを使って、みんなで見つけた生きものの種類や水質調査の結果などをおさらいしました。その水質を調べ、どんな生きものがそこに棲んでいるか知ることは意義のあることです。生きものは自然の中で「食う・食われる」の関係の中でつながりあって生きています。自然はたくさんのお話を教えてくれました。思いがけない質問もあり、私たちスタッフも勉強になりました。(中村)

医科学における歴史的発明・iPS細胞*

祝：山中教授ノーベル医学・生理学賞

◆精子が卵子と受精してできる「卵細胞」には、ヒトの身体の中のどの部分にも分化できる能力(分化多能性(万能性))があり、皮膚にも筋肉にもその他のような臓器にも分化できるが、細胞分裂を繰り返すに従い、万能性は徐々に失われ、一度その臓器に特化したら、他の臓器に再度変化する能力は失われてしまう。このほどの山中伸弥(しんや)京都大教授のノーベル医学・生理学賞受賞(注1)は、一度特化してしまった細胞を安全に(注2)もとの細胞(万能細胞の一種)に戻す方法を確立したことに対して授与されたものである。「人工多能性幹細胞」と呼ばれているこのiPS細胞とは、体細胞へ数種類の遺伝子を導入(注3)することにより、ES細胞(胚性幹細胞(注4))のように非常に多くの細胞に分化できる「分化万能性」と、分裂増殖を経てもそれを維持できる「自己複製能」を持たせた細胞のことである。

◆山中教授の共同受賞者となったジョン・ガードン英ケンブリッジ大教授は、1962年オタマジャクシの体細胞の核を、予め核を抜いた卵に移植すると、受精卵とほぼ同様な多能性を持つようになり、核が初期化することを示した。

◆トカゲの尻尾切りで知られているように、下等動物では、切れてなくなってしまった身体の一部が、再生して来ることがある。植物の場合には、挿し木や接ぎ木として、広く行われているが、ヒトのような「高等動物」の場合には一度失われてしまった臓器が再生することはないと信じられて来た(例外:肝臓の一部を残して大部分を切り取っても、再生すると信じられている)。

◆同一個体の身体の一部(例えば、皮膚)を、他の部分の皮膚に移植することは可能であるが、他人の細胞(臓器や血液)を移植する場合には、免疫系による激しい拒絶反応が起こり、そのままでは移植された他人の細胞は、壊死し排除されてしまう。これを防ぐには、「免疫抑制剤」などを一生、投与して、拒絶反応を弱めてやる必要がある。

◆これを敷衍(ふえん)して言えば、iPS細胞を使った場合には、本人の細胞(または一卵性双生児の細胞)なので、免疫抑制の必要がなくなる。(言葉は悪いが、これまでの臓器移植のように、他人の死を待つ必要がなくなる(待たなくてよくなる))。

◆iPS細胞で何ができ、何ができないか？

山中教授が言うておられるように、現段階では、「治療には役立っていない」が、近い将来に様々な、「革命的」応用が行えるようになるものと考えられ、目覚ましい速さで応用研究が世界中で進められている。我が国が「江崎ダイオード」の轍を踏んで遅れを取らぬよう期待を込めて、その未来予測を考えてみたい。(朝日新聞、12月9日朝刊、2面参照)

◇緊急には役立たない。前もって用意する必要がある。

◇他人の治療には役立たない？

◇天才の脳を別人に移植できるか？

◇ヒトのDNAには、最高生存年齢は120歳を超えられないように書込まれていると言う。これを超えることはできるか？クローンヒツジのメリーの場合には、寿命は元の母ヒツジの年齢に加算するかのようにしか生きられなかったと言われている。

◇新薬の知見に動物実験や「人体実験が不要」になり、アジアの某国で頻繁に行われているとの噂のある人身売買・臓器売買が不要になるか？

◆「独占する」ための特許と「独占させない」ための特許：特許には、研究成果を他者に流用されず独占する権利が個人(特定の団体)に付与される。このことは、人類すべての利益よりも個人(団体)の利益を優先させることも、「成果を人類すべてに明け渡すこともできる」と山中氏は主張。

* iPS細胞 = Induced pluripotent stem cells (人工多能性幹細胞) 誘導多能性幹細胞とも呼ばれる。

注1) 授賞理由：「成熟した細胞を初期化して万能な状態に戻せることの発見」(山中教授、1962年生まれ、50歳)

注2) 「ガン化することなく」安全にの意

注3) 遺伝子を導入する時の仲介者(ベクター)を選ぶことによって、ガン化を防ぐ方法を考案した。

注4) ES細胞：Embryonic stem cellsとは、動物の発生初期段階である胚盤胞期の胚の一部に属する内部細胞塊から作られる幹細胞。理論上、生体外ですべての組織に分化する分化多能性を保ちつつ、ほぼ無限に増殖させる事ができ、再生医療への応用に注目されている。



An onion will not produce a rose?

(玉葱からバラは咲かない?)

(和諺) 瓜のツルにはナスびはならぬ

杏樹小学校3年生総合学習

作柄不良！大豆収穫授業

実施日：2012年11月28日(水) 参加者：杏樹小3年生 3クラス111名

大豆栽培も4年目。6月8日に播種、以来生長を見守り夏が過ぎた。順調のように見えた。ところが収穫間近、莢(さや)に豆が付いていない。大変だ！除草や観察をしてきた生徒たちの期待を裏切る結果だ。さて収穫の授業をどうしよう。そこで一計を案じ授業当日の冒頭、新聞の投書を読み聞かせた。



天気は晴朗なれど大豆不作

それは、大豆の株にカマキリの卵。それを燃やしてしまうとカマキリの子孫は途絶え命の循環が途切れるので、道端の茂みに移してやったという内容。

教室での一通りの説明を終え、大豆畑に向かう。まだ枯れの少ない大豆の株を前に、ほとんど豆が付かない莢の収穫を生徒たちは意に介さず元気に取り組んだ。そして小さな発育不良の大豆を見せに来たりした。予期せぬ発見、教室での読み聞かせのごとく目敏く「カマキリの卵があったよ」と見せに来た子がカマキリの命が繋がるように一之御前の茂みに移していた。



これでも良い方の大豆

大豆の方は残念ながら今年は豊明産のものをやむを得ず用意し、豆腐作りをして残りを来年につなげることになる。

(稲妻)

杏樹小学校4年生総合学習

森の探検

実施日：2012年11月30日(金) 参加者：杏樹小4年生 3クラス92名

11月30日(金)9時から午前中、一之御前社の森で、森の探検を行った。森の中には色々な種類の樹木があると云う事に気づき、森の役割を知って貰おうという試みだ。

事前に、選んだ10本の木に樹名札を付け、樹皮と樹形の写真付きの「おたずね物の木を探そう・君は森の名探偵」と言ったカードを持ち、樹名札の付いた木を探し、見付けたらカードの写真と樹名札の付いた樹木を見比べ、正しいと思う写真のカードに樹名を書き込み、ドングリや木の葉を拾い集めながら10本の木を探すと云うネイチャーゲームだ。1時間の制限時間と色々な注意事項の説明を聞いた後、早速森の中へ入って行った。すぐ見つけた木、中々見つからない木、子供たちは森の中を行ったり来たりしていた。まとめの時間では、答え合わせと森の役割、ドングリや木の葉の観察をしたあと、まとめ用紙に感じた事等を記入し、3つの班のリーダーに発表して貰った。

(岩名)



「おたずね物の木」はどこだあ～

◆子ども達の感想(一部抜粋)

- ・方角がわからなかったけど、太陽の位置でわかった
- ・意外に怖かった
- ・暗くて、静かで、落ち着き感じだった
- ・公園と森の中はぜんぜん違った
- ・ドングリが沢山あって個性的でした

沓掛堆肥センター&東部知多クリーンセンター見学会

実施日：2012年10月25日(木) 参加者：市民9名、環境課3名、スタッフ3名

さる10月25日(木)、参加者9名、豊明市環境課3名、環境研究所豊明スタッフ3名、計15名で堆肥センター見学会を行いました。この見学会は、豊明市からの委託事業である「有機循環推進事業」の一環として毎年実施している事業です。

堆肥センターでは、環境課の担当職員から有機循環事業の概要と堆肥センターの説明を受け、生ごみが堆肥に変わる様子を見学を行いました。

堆肥センター見学の後、新しい試みとして東浦町にある東部知多クリーンセンターに向い、豊明市から出るごみがどのように処理されているかを見学してきました。

それぞれの施設では、参加者からの質問が多く出され予



東部知多クリーンセンター 担当者の説明を聴く

定時間をオーバーする状況で、参加者の関心の深さを伺い知る事ができました。(岩名)

サツマイモ体験農園

実施日：2012年11月10日(土) 参加者：32世帯102名、スタッフ11名

収穫祭



焼き火で焼いたお芋は美味しかったよ！

11月10日、快晴の青空の下で「サツマイモ体験農園」の収穫祭を行いました。

5月26日に苗の植付けを行い、8月11日に草取り、10月6日に蔓返しを行って貰いましたが、この間、8~10回畑に来て草取りなどの作業をされた参加者もおられたようです。我々スタッフも、田んぼを畑にして初めての苗の植付けだった為、うまく育つか不安でした。その為、何度か巡回し様子を見てきましたが、やはり根付きが悪く枯れた苗もありました。そこで、3度にわたり補植をしたり、追肥を行ったりしてきた経緯もあり、出来具合が心配な収穫祭でした。

大きな芋が収穫でき量も採れた所もありましたが、ほとんど収穫できなかった所もあり、収穫にムラがあったようです。

参加した方にアンケートを書いて貰いましたがその結果も、良くできていたと余りできていなかったが、ほぼ半々でした。それでも、「来年も参加してたくさん採れるよう頑張る」「大きな芋が採れるよう来年もチャレンジする」等と、ほぼ全員の方が来年も参加すると答えていました。

最後に、皆さんに焼き立ての焼き芋を味わっていただきましたが、「美味しい」と満足な様子でした。

◆アンケートの感想文1例を紹介します

家族の不幸があり、中々草取りに行くことが出来ませんでした。草取りをまめにされていた方は収穫の成績も良く、手をかければかけたほど、成果が出ると思えました。子供たちは芋ほりがとても楽しく、どちらが採るかで喧嘩するほどでした。昔は焼き芋をよくしていましたが、環境の問題で最近では中々できません。子供たちに焼き芋をして食べるという貴重な体験までさせて頂きありがとうございます。機会があればまた参加したいと思えますが、欲を言うと、水やり、草取りの関係で、移住地区で出来たら有難いなと思いました。もう一つ、食物を育てる事の大変さもよくわかり、食べられる事の有難さや、食べ物を大切にすること(捨てない、残さない)なども、子供たちに伝えて行きたいと思いました。

(岩名)

— 市民42名が参加 —

「ぶらり豊明おもしろ発見！」

「ぶらり豊明おもしろ発見」は、大勢の市民の皆さんが参加され好評裡に終了しました。

「ぶらり豊明おもしろ発見」は、平成22年と23年に豊明市内のため池や自然と史跡・寺社を巡り歩き尽くしました。それで、今年は豊明市内にある中京競馬場、愛知豊明花き地方卸売市場や桶狭間古戦場に所縁のある高德院を選んで、30名の参加者を募集しましたところ、42名の応募がありました。好評でしたので全員に参加して頂きました。

◆第1回講座 11月1日(木)

「中京競馬場」見学

会議室で甲田穂波総務課長が、「中央競馬場会が全国に8カ所あり競馬の売上800億円の約半分を占め、売上金の32.5%を国庫に納め、残りの67.5%が払戻金に充てられていること、全国で中京競馬場だけが名古屋競馬(株)から借地していること、中京競馬場が災害発生時にはヘリポートに使用されることや日本の競馬の歴史」などについて説明されました。

小山専太郎施設整備課長に、リニューアルしたパドック、勝ち馬検量室、コース全体が見渡せる4階の観覧席、環境共生型競馬場として各所に取り入れた様々な省エネ設備や馬場内にある遊園地、乗馬センターなど広大な競馬場を1時間かけて案内して頂きました。



観覧席をバックに記念写真！

◆第2回講座 11月19日(月)

「愛知豊明花き地方卸売市場」見学

伊藤俊彦主任から、「愛知豊明花き卸売市場は全国1位、アジア最大、世界第5位の鉢物卸売市場で、毎週月曜日と木曜日に全国各地から集まってくる花や植物約105万鉢がモニターの映像によってセリに掛けられている」との説明があり、その後2班に分かれて卸売市場を見学しました。



出荷を待つ シクラメンやパンジーなどの鉢花

台車6,000台に載せられた鉢物の花がセリにかけられ、出荷先ごとに台車に看板を付け手際よく仕分け出荷されていました。モニターの画面に現れるセリ値の変動は臨場感がありました。屋外では、江戸菊や東海道五十三次の名前が付けられた菊の展示を興味深く鑑賞しました。

◆第3回講座 12月1日(土)

「高德院と桶狭間古戦場伝説地」見学

高德院の本堂で湯川ご住職が、インターネットで入手された貴重な昭和22年頃の高徳院付近の写真や当時米軍が写した航空写真などを見せて頂きました。そして、「山門の直径30cmの柱は樹齢2,600年のタイワンヒノキを使用したこと、旧東海道が高徳院の敷地を通っていたこと、現在の中京競馬場前駅は競馬場が出来る前は桶狭間駅で競馬場建設の飯場が高徳院にあったこと、ホシザキ電機があるところは小高い山で遠くからも良く見えたので今川義元が本陣をここに置いたのではないかと想像される」など約1時間のご講演を大変興味深く拝聴しました。その後で桶狭間古戦場公園を見学して全講座は終了しましたが、数人の参加者が希望されたので有松の桶狭間古戦場公園にも行って来ました。

「今回の「ぶらり豊明おもしろ発見」は、個人では中々行けない所なので3回とも大変良かった。次回もお願いします」と参加者に云われました。(似内)



野菜づくりは心の経営



おらが農園耕作者 BUSH代表 一木 登紀男

今回コラムを担当させていただきます、一木と申します。さてコラムをお願いされたのはいいのですが何を書けばいいのやら、そもそも私が野菜づくりを始めたのが、今から7年前になります。緑区に小さな家を建てたときがきっかけになります。丁度一坪分の畑から始まりましたが、さて何をどうすればいいのやら、そのとき丁度庭作りにきていただいた植木屋さんから少しアドバイスをいただきました。

◆野菜づくりは土づくりから

宅地の土は山土でかなり水はけが悪く、野菜づくりには向かないとのこと。そうであれば水はけの良い土地にするにはどうすれば？の問いに、川砂を流し込んだらどうかと教えていただき、早々に土作りを開始いたしました。そして念願であった苗を植えることに。最初は作りやすい、キュウリ、トマト、ナスに挑戦！毎日成長が楽しみで朝早く起きては、観察、夕方仕事から帰れば観察、ワクワクして毎日が子供に会うような感覚があったのを覚えております。ところが10日たったあたりから、枯れはじめてきました。何故かわからず、また新しい苗を購入し植え直しました。原因をネットや経験者からの聞き取りによるとどうも肥当りということのようです。確かに良く効くように、根っこにあたるよう植えたのが原因のようです。私としては、肥料を沢山効かせば大きくなるのであろうという素人考えでした。

2回目は大丈夫であろうと、また朝夕と同じ行動の繰り返しでまたまた大きな問題に直面しました。キュウリの葉は白くなり、ナスは枯れ、今度は何が原因か？病気と害虫被害のようです。そうして初収穫は忘れもしない、キュウリの苗1本から採れた本数はわずかに2本、プチトマトは1房、いや2房ぐらい、ナスはゼロ。かなり情けない結果に終わりましたが、採れた野菜が恋しく、家族に自慢しおいしくなかったのですが、美味しく味わったのを覚えております。そして秋野菜、冬野菜と頑張ったのですが、結果は惨敗、野菜づくりがこんなに難しいことを実感した1年でした。同時に農家の方達のご苦労が身にしみて感じられた1年でした。それと同時に野菜を購入するのは、国産にしようかと心に決めた次第です。それと同時にこんないい加減な気持ちで

は野菜に申し訳ないし、将来自給自足がいいと思っていることの空想を現実にするにはやはり真剣に取り組む姿勢が大事で、スイッチが入った瞬間でもありました。そして2年3年と過ぎ少しずつ形になるようになってきました。それと同時にご近所にお配りすると、とても喜んでいただけるし、コミュニケーションが取り易くなりました。その中であることに気が付くことになります。

◆子育てと野菜づくりの共通点

私は徳重のユメリアと豊明のピアゴの前で2軒の美容室を経営しております。名は「BUSH」といい、とてもいいスタッフに恵まれ、お客様にかわいがってもらっております。美容室というものは、美容師を育てる場所にもなります。人を育てることはとてもエネルギーのいることで、なかなか思い通りにはいきません。この子にはこういう話し方、この子はそうではなくこういう接し方というように一筋縄ではいきません。それが野菜づくりととても似ていて、教えすぎてもだめで(肥料や水)、ギリギリまで緊張感をもたすことも大事で、その見極めが、子育て、教育、野菜づくりにかなり共通点があることを発見しました。

ただただ手を加えるだけが、教育ではなく、待つことの大事さも教えてもらいました。

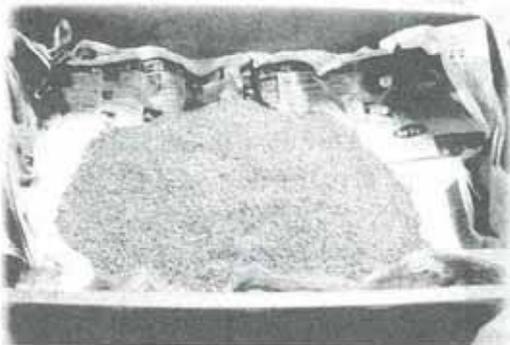
その最中のおらが農園との出会い、少し作れるようになってきたので、欲が出てきたのでしょう、もっと沢山作り、もっと色々な種類を作りたいと思い、借りることにしましたが、なかなかの荒地地、もともと田んぼであったことで水はけが悪いのですが、そこは経験済みだし問題ない。そしてなにより隣で本職の方がいて、人柄のいい方で困ったときに指導してもらえ、とても勉強になっております。最近当社のスタッフなども、コンビニ弁当が多く、ついつい肉系が多くなるようで、採りたて野菜で料理をして食べさせるととても喜びますね。大根はみずみずしく、ニンジン土の香りがするほどニンジンらしい。野菜づくりで色々な経験をし、知識をつけてもらい、本当に野菜づくりに、野菜に感謝ですね。

僕にとって「野菜づくりとは」と聞かれると、今は、心の経営の一部だとハッキリ言えますね。

稔り山田試験農園から…



秋の稔りを夢みて太陽が照りつける中での秋冬野菜の種まき・植え付け作業から、待ちに待った家族揃っての収穫作業、農園のあちこちから歓喜の音が響いていた。サツマイモ、秋ナス、オクラなどの収穫作業であろう。



収穫した金ゴマ

晩秋・初冬にかけては、ダイコン、カブ、ハクサイ、ニンジン、キャベツ、サトイモなどの収穫と併せ、春野菜の植え付け・準備作業が始まっている。来春に期待して野菜の収穫を待つ!!

農園全体では100種類を超える野菜が栽培されていると思われる。

さて、NPO 自主管理区画の耕作では…? 山田試験農園から豊明特産品をと栽培開始から3年目となった「アビオス」、2年目の「ヤーコン」、本年から栽培した「金ゴマ」の3種、なかなか目標達成には程遠い状況ではあるが「一心不乱」で目標達成に向けて努力を重ねてきた。目標の実現を見るのは何時になるであろうか……? (熊谷)

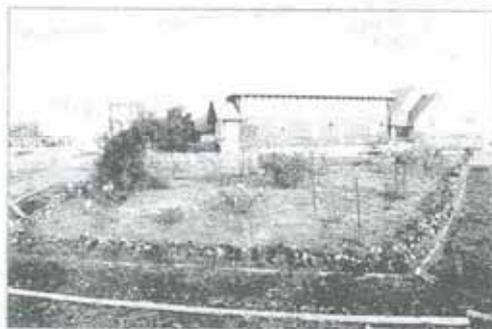
パンジーの植付け 2012. 11. 20

毎年、山新田の横山節子様からパンジーの苗をたくさん頂いています。

今年も色とりどりの愛らしいパンジーが届き、感謝しながら文化会館の駐車場近くのバラ園に植付けました。

冷たい北風の吹く中でも、咲き続けるパンジーの強さと愛らしさに心も温かくなります。

来年の5月過ぎまで、道行く人々を楽しませてくれることでしょう。花のある街はやさしい街だと思います。



レンゲソウの種まきしました 2012. 11. 10

レンゲ畑が広がる日本の田園風景は、美しく懐かしい思い出となっています。これを蘇らせようと、間米町純掘(どんぼり)の遊休農地に種まきしました。うまくいけば、来年の5月頃にはレンゲの花畑がお目見えするでしょう。

子どもたちがレンゲ畑の中を走り回ったり、冠を作ったりしている所を想像しています。

レンゲ祭もいいですね。お楽しみに(o)ノ。

「おらが農園」耕作者募集中!

- ◆場 所: 豊明市間米町純掘(どんぼり) (唐竹小の近く)
- ◆1区画: 50㎡
- ◆使用料: 月 3,000円(年一括払い) 残り1区画

●新規格「おらが農園」予約受付中!

- ◆1区画30㎡ (16区画)
- ◆使用料: 年間 15,000円 (共同農具倉庫・貸出農具付き)
- 水はいつでも使用できます。
- 農作業塾・交流会、その他サービス付
- ▲詳しくは事務所までお電話ください。

0562-93-3044 (月~金 午前 10時~午後 4時まで)

「ふゆみずたんぼ」3年目が終わりました

9月に稲刈りやはざかけが終わったと思えば季節は冬になり、脱穀は10月に、籾摺りは11月に行われ、ふゆみずたんぼのお米は玄米へ姿を変えました。脱穀は難なく終わりましたが、籾摺りは機械がうまく動かず、少し手間取ってしまいました。毎度のトラブルに少しがっかりしましたが、たんぼには機械の力が欠かせないので、もうトラブルは付き物と考えた方が良さそうです。



11月13日 8:00~14:00 籾摺り作業

籾摺りも終わったので、来年度に向けてたんぼに米ぬかを散布しました。その後、水を張りふゆみずたんぼ3年目は終わりを迎えました。

今年のお米の収穫量は494kgほどで、去年とほぼ同じでした。ただ粒の大きさは前より大きくなったように思います。農家は1反あたり8~10俵(1俵=60kg)は取れるらしく、ふゆみずたんぼは2反ほどの広さなので、約半分の少なさです。農家には敵いませんが、来年は収穫量を少しは増やしたいものです。

来年はふゆみずたんぼは4年目に突入します。昨年と比べて、余り変わったとは言えませんが、まだまだ時間のかかることなので、根気よく頑張っていきたいと思っています。

(吉田)



11月28日 10:00~11:30 米ぬかを散布

豊明市のため池調査

実施日：2012年12月3日(月) 調査者：水質調査班5名

今年度もため池の水質調査を下記の通り実施しました。水質は全般的に改善傾向にあるようです。生活排水や田畑から肥料などの流入が減少したのでしょうか。

ため池は、多様な生きものの命を育む貴重な場です。最近、冬鳥の飛来が少なくなりましたが、濁池や若王子池でマガモ、コガモ、ハシビロガモなどを観察しました。(中村)



道池 透視度計で水の濁りを調べています

	大原池	大蔵池	濁池	勅使池	若王子池	道池	荒巻上池	三崎池	環境基準
調査時間	9:10	9:25	9:40	10:00	10:20	10:40	10:55	11:10	
天候	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	晴	
気温 °C	6	8	6	2	5	5.5	6	6	
水温 °C	8	9	8	7	9	10	10	10	
透視度 cm	29	9	24	12	34	21	34	21	30以下
COD mg/l	5	5	8	10	3	3	3	4	2~10
pH (水素イオン濃度)	6.5	7.2	6.8	7.7	8.5	6.5	6.4	6.9	6~8.5
亜硝酸性窒素 mg/l	0.01	0.02	0.02	0.02	0.02	0	0.02	0	1以下
リン酸態リン mg/l	0.01	0.01	0.01	0.02	0	0	0	0	0.1以下
水の色	淡黄色	淡緑黄色	無色	淡緑黄色	無色	無色	無色	無色	
におい	無し	無し	無し	無し	無し	無し	無し	無し	

※ COD、亜硝酸窒素、リン酸イオンは、(株)共立理化学研究所のバックテストを使用しました。

・CODとは、化学的酸素消費量のことで、水中にある物質(主に有機物)が酸化剤によって酸化や分解される時に消費される酸素量を表し、数値が高いほど、水が汚れていることを示します。

・亜硝酸態窒素とは、アンモニアが硝酸になる際の中間生成物で、有機物の多い汚れた水に多く存在します。

炭焼き活動を活発に !!

美浜町炭焼き研究会 視察・研修受入れ

去る12月19日(水)炭焼きの活動日に合わせて、遠路知多郡美浜町から役場のマイクロバスで、行政2名、研究会メンバー18名の合計20名が我々の炭焼き場である「棧敷窯」に視察・研修に来られた。10年余の活動の沿革などを話したが、当方より一行の活動歴は長く平成11年「布土かぐや窯炭焼きクラブ」を設立、翌12年に現研究会設立とのこと。活動組織は、傘下に10窯とその他の窯6窯を抱え18行政区で活動しているとのこと。

組織人員を聞き逃してしまったが、私たち炭焼班は7~8名程度で活動しているのに比べ大変な規模と推測する。

研究会組織も高齢者が大半とのこと。活動の場が生き甲斐、健康づくりにもなっている状況で、視察者メンバーもそれを反映し元気な顔ぶれであった。当日は寒さを心配して、ハウスの中で意見交換などしたが、皆さん「寒いな～」の声などなく、ハウスを出て炭焼き窯の見学に話がはずんだ。

行政も一緒になって役場内に事務局を提供し、焼いた竹炭の販路も道筋をつけているなど参考になることが多くあった。今後、情報交換しながら、お互いの活動が活発化していくことを期待し、予定時間をオーバーして2時間近くの視察を終え帰路のバスを見送った。

(稲妻)



美浜町炭焼き研究会の皆様と記念写真

環境川柳

- ◆ 地産なら輸送コストも安く済み
- ◆ 健康の秘訣は地産有機から
- ◆ 食材を輸入をしては残飯に
- ◆ 菜の花が昔咲いていた荒れ畑
- ◆ あちこちで休耕田が泣いている
- ◆ 麦畑知らぬ大人も多くなり
- ◆ 稲子にも分けてやりたい稲の穂を
- ◆ 電力も自給自足にしたいもの

豊明市 高木 次郎

- ◆ 近いうち環境改善マニフェスト
- ◆ 憧れたナガサキアゲハ庭に舞う
- ◆ 厭離汚土欣求浄土の里づくり
- ◆ ムコ殿か困われ者か東山

豊明市 野陽 寿好

キノコの観察会を開催

～ ちょっとかじって味見も ～

二村山環境保全推進協議会

副会長 浅野 守彦

好天に恵まれた10月8日(月・祝日)、茸狩りを楽しみながら身近な自然に関心を持ってもらおうと二村山で初めてキノコの観察会を開催しました。講師は豊明市史でキノコを担当した三津井宏さんと三河キノコの会の木村修司さんです。

駐車場に集合した参加者は、主催者あいさつと講師紹介のあと、キノコを探すために二村山緑地に散って行きました。スズメバチも心配でしたが、私たちが一番心配したのは「参加者楽しんでもらえるだけのキノコが二村山にあるだろうか?」という点です。実は観察会前々日の6日(土)には三津井さんに下見をしていただき、ある程度キノコが発生していることは確認していましたが、そんな心配は参加者の「収穫」を見て杞憂だったことが判かりました。参加者は「収穫」をブルーシートの上へ置き、講師はそのキノコの名前を紙に書いて置いていきます。ブルーシートはキノコでいっぱいになりました。こんなに二村山にキノコがあったのか。こんなに種類(71種類!)があったのか。驚きが感嘆の声になって出ます。

三津井先生からは食べごろのキノコを使って、少しずつちぎって参加者にも食べてもらいながらの味の講義やヤマドリタケモドキが西洋ではマツタケより評価が高いなど興味あるお話。



集まったキノコを見る三津井先生と参加者

続いて木村先生は毒キノコが多いテングタケの仲間、食用の多いイグチの仲間など分類順のキノコの解説と「食用のキノコを覚えてもそれによく似た毒キノコも覚えないと危ない」「『うまく裂けるのは食用』というは間違い。」とのご注意。参加者は熱心に聞いていました。

三津井先生はかつて二村山でよく採れた「アオハチ」というキノコを豊田市で採取し持参して見せてくれました。年配の方は懐かしそうに数十年ぶりにアオハチと再会していました。

二村山のキノコに関心を持たれた大変有意義な観察会でした。

■二村山 里山整備と自然観察会1～3月のスケジュール■



	1月	2月	3月
里山整備	6, 20日(日)	3, 17日(日)	3, 17日(日)
自然観察会	27日(日) 厳冬の二村山	24日(日) ミヤコヤナギ咲く	24日(日) マキノスミレ咲き初め

▲里山整備 集合場所/二村山駐車場(県道沿い) 集合時間/9:00 活動時間/午前中

▲自然観察会 集合場所/勅使臺園駐車場 集合時間/8:00 活動時間/午前中

URL <http://park.geocities.jp/huta1311mura/hutamurayama-top.html>

INFORMATION

有機循環推進フォーラム2012

新たな循環型社会へ!

「循環都市とよあけ」を目指し、下記のような「有機循環推進フォーラム 2012」を開催します。是非、ご参加ください。

- 日 時 2013年2月23日(土)13:30～
- 会 場 豊明市商工会館 1階イベントホール
- 参加費 無料
- 講 演
岡山 朋子氏 (豊橋技科大 特任研究員、「おかえりやさい」プロジェクトリーダー)
石井 伸弘氏 (かえる農園、電気をカエル計画 代表)
石川 英明氏 (豊明市長)
- コーディネーター
浜島 昭二 (NPO法人環境研究所豊明 理事長)



【主 催】 豊明市/NPO法人環境研究所豊明
【問合せ先】 NPO法人環境研究所豊明 (月～金) 10:00～16:00 電話 0562-93-3044

平成24年度後期講座 農作業塾&交流会

野菜栽培の質問にアドバイス!

- 日 時:2013年3月2日(土)10:00～13:30
- 場 所:豊明市農村環境改善センター
- 講 師:小島昌幸氏 (JA尾東南部営農センター)
- 参加費:300円

○内 容: 野菜栽培・管理について事前受講者から質問を受け付けます。講師がこれに直接、アドバイスをします。その後、「ふゆみずたんぼ」で収穫した新米のおにぎりとお汁を美味しくながら交流します。

○主 催: NPO法人環境研究所豊明 山田試験農園運営委員会

NPO法人環境研究所豊明 設立10周年記念パーティー

- 日 時:2013年3月23日(土)11:30～13:30
- 場 所:環境研究所豊明 事務所
- 会 費:3000円

当NPOは、2002年に設立し紆余曲折を経て10年過ぎました。長いようで短い10年でした。

つきましては、10周年を記念して、会員、関係者の皆様とささやかな立食パーティーを開催します。

後日、ご案内をお送りしますが、是非、予定しておいてください。お楽しみに!

環境研究所豊明 1～3月までの活動予定

- 事務所の仕事はじめ 1月7日より
- 竹やぶの整備・竹炭焼き 1月9日より 毎週水曜日
- おらが農園作業 毎週金曜日 13:30～(変更あり)
- ふゆみずたんぼ 施肥など
- 花畑 バラの選定、施肥、草取りなど 2月
- NPOフェスタ参加 2月3日
- 杏掛小3年生「豆腐づくり」授業
2月13, 15, 20, 22日(内1日予備日)
- 有機循環推進フォーラム2012 2月23日
- 農作業塾&交流会 3月2日
- 平成25年度「山田試験農園」契約更新日 3月9,10日
- 杏掛小3年生大豆栽培振り返り授業 3月11日
- 環境研設立10周年記念パーティー 3月23日



第10回「NPOフェスタ in 豊明」

- 日 時:2013年2月3日(日)
9:30～14:00
- 場 所:豊明市 中央公民館
- 参加費:無料

○主 催: とよあけ市民活動NPO連絡協議会
○共 催: 豊明市

